

国際調査からみえる日本の母親の特徴



無藤 隆 白梅学園大学大学院特任教授

今回の調査結果のなかで、日本の母親の特徴についてまとめたいと思います。日本の母親の子育て意識としては、幼児期は自立を優先し、早期教育などは優先順位が低い傾向がみられます。「自分の考えをもつ」いう自立を大事にしつつ、友人や家族を大切に人間に育てたいと考えています。その一方、他人に迷惑をかけない人になってほしい、という伝統的価値観が保持されており、社会や仕事への関心は比較的薄いようです。子どもを大事にし、独立した人格とする反面、家族への意味を強調する傾向が見取れます。

「学びに向かう力」は、5つの因子が同時に伸びていくのではなく、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」としての順番で伸びていく傾向が見られました。そして、母親の「寄り添い型養育態度」が「学びに向かう力」の成長と関連しています。この傾向は、日本以外の3か国でも同様に見られました。

他に、本速報版では割愛していますが、親子と一緒に遊ぶ活動が、子ど

もの「好奇心」とつながっています。また、母親が学びの環境を整備するような行動が、子どもの数の知識の獲得とつながっています。母親が子どもの思考を促すような姿勢が、子どもの「学びに向かう力」の成長と関連が高く、さらに、「分類」や「言葉」の力も促すようです。

まとめると、日本の親はかなりの多様性があります。幼児教育を子どもの自主性を伸ばすものとしてとらえているといえます。保護者の、子どもの意欲や自主性や思考を促す養育態度が「学びに向かう力」を伸ばすのかもしれませんが、ただし、数や文字の獲得は、保護者の養育態度自体よりは、それに向けた教材その他の環境整備が影響するようです。

今回、4か国の比較調査を行い、乳幼児を育てる親としての共通性が多く見られるとともに、文化とさらにその中の階層による違いが浮き出てきたように思われます。その時代による変化もおそらく背景にあるはずで、とりわけ、育児への意識や人間関係、またそこでの学びの道具やメディアや遊びのあり方などは変化が見えてきました。

幼児期の家庭教育についての国際調査が示すもの



榊原洋一 お茶の水女子大学名誉教授／チャイルド・リサーチ・ネット所長

今回の調査結果には大変興味あるいくつかの知見が含まれていると思います。まず、子どもの「学びに向かう力」の構造が文化や歴史の異なる4か国でほぼ同様であったことは、家庭教育環境の普遍性を示しています。幼児教育の開発はグローバルな課題であることが証明されたと思います。

さらに、母親の「寄り添い型」の育児姿勢が、子どもの「学びに向かう力」を涵養していることが示されたことは、寄り添い型の幼児教育の実践を維持している日本の選択が正しかったことを裏書きするいわば溜飲の下がる結果でした。

その反面、いくつか気になる知見も得られました。子どもの存在の意味について、日本では「配偶者・パートナーとの関係をつないでくれる存在」と見なす回答が他国に比べて高く、逆に「将来の社会を担ってくれる存在」と見なす回答が最も低かったことは、日本の家庭のやや内向きな傾向を示しているように見えます。経済的発展の著しい中国やインドネシアだから、子どもを未来の社会の担い手と見なす傾向が高いともいえますが、

既に成熟した経済状態を維持しているフィンランドにおいても、子どもを未来の社会の担い手として期待しているのです。世界一速いスピードで少子高齢化が進む日本で、子どもの社会的貢献を期待する回答が低いことは検討を有する課題ではないでしょうか。

また、子どもの生育環境において重要な位置を占めるメディア環境において、IoT化社会（Internet of Things；モノのインターネット）の新しいメディアであるタブレット端末の使用率が4か国中最も低かったことも課題です。米国ではタブレット端末などのデジタルメディアには、子どもの発達に資する可能性があることが示唆されていますが、タブレット端末の使用がフィンランドの3分の1しかないことは、STEM教育の重要性が強調される現代日本社会において憂うべき事態といっても良いかもしれません。

STEM教育：Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の4領域を重点的・統合的に考える教育。

幼児期の「学びに向かう力」と親の養育態度における文化差



荒牧美佐子 目白大学准教授

本調査の特長は、幼児期の親のかかわりと子どもの認知的・非認知的スキルの育ちとの関連について、これまで蓄積されてきた国内調査での知見をベースに、他国との比較を行った点にあります。国際比較を実施するにあたり、調査項目の選定は、各国の実態を捉える上で齟齬が生じないように、それぞれの国の有識者に助言を仰ぎながら、慎重に行いました。しかしながら、得られた回答データを分析すると、日本では望ましいと考えられる親のかかわりが、他国においては必ずしもそうでなく、価値づけが異なる可能性が見えてきました。例えば、フィンランドでは、平日と休日などで生活リズムはあまり変えないそうで、幼児の生活においても、親がわざわざ早寝・早起きを心掛けるといった習慣がないようです。食事に関するマナーに求める厳格さや、子どもがスマートフォンやタブレット端末にどの程度接触しているかも国によって違いが見られま

した。

また、日本では多少、過干渉でネガティブであると思われるような子どもへのかかわりも、インドネシアでは、必ずしもそうだとはいえないようです。日本や中国、フィンランドでは、「寄り添い型養育態度」が子どもの「学びに向かう力」にポジティブな影響を与える可能性が示唆されましたが、インドネシアでは、「保護型養育態度」もまた、子どもの自己制御能力等との間にポジティブな関連があることが明らかになりました。「学びに向かう力」の構成要素は、ある程度、各国共通であると言えます。それらのスキルを伸ばすための親のかかわりについては、絶対的な望みさや理想があるわけではありません。それぞれの文化的な背景に基づいた価値観等が、親の養育態度や子どもの発達にも影響していると言えるようです。

社会文化的環境を超えて共通する母親のかかわりと「学びに向かう力」

調査をふり返って

ベネッセ教育総合研究所
持田聖子

本調査の企画に賛同し、各国での調査の監修をお引き受け頂きました国内外の専門家諸氏、そして、多くの質問から成る調査に回答を頂いた、4か国の約4,900人のお母様たちに、まずは心からの感謝を申し上げます。グローバル化が進む社会において、社会文化的に異なる環境にある、いずれの国の家庭においても、幼児期からの「学びに向かう力」の育成が、子育てにおいて重要視され、その力の成長は、母親の子どもの意思を尊重し、寄り添うようなかかわり方と関連することは、貴重な知見と言えます。4か国の保護者や、幼児教育にかかわる方々にとって、本調査の知見が、よりよい幼児期の家庭教育を考える際の示唆となることを願っています。